

子どもたちに伝えたい動物飼育の魅力

—子ども家庭庁の事業への参加を通じた
教育委員会以外の所管からのアプローチ—

関 一弥[†] (公社北九州市獣医師会会長
公社日本獣医師会学校動物飼育支援対策検討委員会委員
せき動物病院 院長)



1 はじめに

近年、人の健康と動物の健康、そして環境の健康（健全性）は相互に密接にかかわっているとすする「ワンヘルス」の概念が取り上げられている。この中では基本方針として「人と動物の共生社会づくり」、「健康づくり」が掲げられている。この観点から考えたとき、動物の飼育は、子どもだけでなく、生産年齢にある世代、とりわけ働き盛りの世代にとって、心理的な癒しやストレス軽減、健康的なライフスタイルの促進に役立つことが多くある。また、高齢者にとっては心身の健康促進や孤独感の軽減、社会的交流の促進などにも有用である。しかし、現代では、経済的な理由等により動物に対して感受性の高い時期にある子どもたちが身近に動物を飼うことができないケースが増えてきている。

近年では、デジタル技術の進歩により、SNSや仮想空間（メタバースなど）のバーチャルな社会やAI技術を用いたペットロボットが登場している。これにより疑似的に仮想の動物の世話をしたり、インターネットを通じ顔の見えない他者との関わりが増えてきた。しかし、本物の動物と関わらないことは命の温もりを感じられず、他者の気持ちを考えない行動が増える事例にもつながっていると思われる。

私は、20年程前に東京都獣医師会の故中川美穂子獣医師とお会いし、子どもたちの教育には疑似的な体験ではなく実体験を伴う経験を通じて、「他者（人・動物）のことを考える心」を教えていくことが重要であるとお教授いただき、すぐに北九州市獣医師会で学校動物飼育支援活動を立ち上げ活動をはじめた。他県においても同じ思いで、この活動を始めた先生方がおられるが、現在

では学校における動物飼育数が20年前と比べて激減しており、この活動が停滞している地域も少なくない。動物飼育数減少の原因は、鳥インフルエンザの流行による鶏をはじめとする鳥類の飼育数減少、休日や長期休暇における飼育の世話への負担、アレルギーを持つ子どもたちへの対応、教職員の「働き方改革」に基づく業務見直し、新型コロナウイルス感染症の蔓延によるふれあい授業の中止などがある。一般に、多くの方々子どもたちの教育に動物飼育は必要であることを理解いただけるが、上述した課題の解決には至っておらず、関係者の理解と努力が必要である。

私の地元である北九州市においても、活動当初と比べ動物を飼育している学校が減少している。しかし、いくつかの学校では、内容の濃い活動、例えば獣医師による学校訪問や、飼育場所を子どもにより近い教室内に移し、日頃から命のふれあい体験をさせる環境下で積極的に動物を授業へ活用したり、学年を超えた活動の引き継ぎを行うこと等が継続されている。学校飼育動物支援の新たなフェイズに移行しているといえる（図1、図2）。

長年の学校飼育動物支援活動を通して、取組を進めるためには社会全体の理解が大切であると感じる。子どもたちの豊かな心を育むうえで、動物の飼育は重要かつ有効であるが、その教育活動を学校現場に全て委ねるのではなく、子どもに関わるさまざまな機関や所管部局が総合的に取り組む必要がある。

しかしながら、子どもたちに対してのさまざまな施策は、縦割り行政の中で複数の省庁が所管しており、地方においても対応部局が分かれていることから包括した対策になっていないのが現状である。

そうした中、令和3（2021）年、「子ども政策の新たな推進体制に関する基本方針」が閣僚決定され、新たに「子ども家庭庁」が創設された。「子ども家庭庁」は従来、

[†] 連絡責任者：関 一弥（公社北九州市獣医師会）

〒805-0071 北九州市八幡東区東田1-3-6

☎ 093-662-1054 FAX 093-662-0925

E-mail : vet-kita@clock.ocn.ne.jp



図1 18年間に渡り筆者とともに活動を続けている幼稚園にて



図2 モルモットの心音を聴く子どもたち

複数の省庁に分かれていた子ども政策について、一元化して対応することにより、「こどもがまんやかな社会」を実現することを目指している。

令和5(2023)年5月、子ども家庭庁から「NPO等と連携した子どもの居場所づくり支援モデル事業」の公募が行われた。縁あって、北九州市(子ども家庭局)がこの事業に参画し、「公園型プレーパーク活動を通じた『子どもの居場所』再構築モデル事業」に取り組むことになり、北九州市獣医師会に協力依頼があった。事業の内容は、プレーパーク活動に参加した子どもたちがペットとふれあえる機会を創出し、また、ペット飼育者向けにプレーパークに関する啓発を目的としたイベントを開催するものであった。

学校飼育動物支援活動を行ううえで、学校内は教育委員会の所管であるが、校外は所管が異なる。今回依頼された北九州市子ども家庭局は放課後児童クラブ(学童保育クラブ)を所管する部署であることから、北九州市教育委員会と北九州市獣医師会が行っている学校飼育動物支援活動の主旨をお伝えし、飼育動物を放課後にも活用する場を広げる将来構想も踏まえつつ、今後の関係構築に、大変有意義であると考え、今回の協力依頼を承諾した。以下に事業の具体的内容を紹介する。

2 事業の内容

北九州市獣医師会が、北九州市が事業実施主体である「公園型プレーパーク活動を通じた“子どもの居場所”再構築モデル事業」に協力し、プレーパーク活動に参加した子どもたちがペットに触れる機会を創出するとともに、ペット飼育者向けにプレーパークに関する啓発を実施した。プレーパーク活動とは、北九州市による子どもたちが自然にふれあいながら自分の責任で自由に遊ぶことのできる外遊びの場所(プレーパーク)を普及・促進する活動である。

昨年度、3回の開催が計画されていたイベントのうち、



図3 クイズ「獣医さんに挑戦！」に参加する子どもたち

1回目は諸般の都合で日程が合わず、2回目はプレーパークの開催が地域の意向により、平日午前中に幼児を対象に開催することとなった。このため、令和6(2024)年1月27日に開催された3回目のイベントに本事業を活用して参加協力し、次の2つの企画を実施した。

(1) ペット(犬・猫)についてのクイズ「獣医さんに挑戦！」(図3)

対象: 子どもたち、**内容:** 学校飼育動物支援活動で伝えたい事項を犬猫に置き換え、クイズラリー形式でストーリーを考えた問題(10問)から構成される。

最初は犬猫に対する知識を深めるよう、興味を抱かせる内容からスタートし、最後は、動物や飼育者の立場に立って他者を思いやる気持ちを抱かせる内容にした。

出題例: 「犬猫ってどんな動物か?」、「彼らはどんなことが好きか?」、「彼らはどんなことを嫌うのか?」、「ワンちゃんがこんな表情をしているときは怖がっている?」等。

方法: 子どもたちがクイズに回答した際に獣医師から理由等の解説を行った。例えば、「怖がっているワンちゃんに急に触るとワンちゃんは当然、嫌がるし、その飼い主さんも嫌な思いをするんだよ。」というように、この



図4 犬の体脂肪測定

クイズを通して、子どもたちに犬や猫などの動物飼育の魅力や、公園で散歩中の他の犬、さらには自分より小さい子どもたちへの対応など、他者を思いやる気持ちを伝えた。

(2) 犬の体脂肪測定 (図4)

対象：犬を散歩させている一般市民 (大人)、**内容：**愛犬の体脂肪測定及びなんでも相談として、立ち寄った飼育者に対して愛犬の体脂肪測定後、測定結果を報告書にして配布した。

報告書には、「測定結果」、「公園で遊ぶ子どもたちへの理解と共に地域防犯としての役割を普及する内容 (市作成の防犯的な内容の資料)」を記載した。また、口頭による説明では、「災害時の対応方法」、「公衆衛生上の問題としての愛犬の糞尿に関する知識の普及」とともに、「お散歩は排泄の時間ではないこと」などを伝えた。

3 実施結果

今回のイベントでは、参加した子どもたちや飼い主さんに対して一方的に説明するのではなく、参加型の企画を実施した。クイズ形式の企画では、子どもたちも楽しみながら動物散歩中の犬など、身の回りの動物たちへの思いやりの大切さを理解している様子がみられた。

一方、従来行ってきた市民向けイベントの反省点として、市民への啓発活動を行うにあたり、印刷されたチラシ等を配布するだけでは意図が十分に伝わらず、最悪の場合は帰りに捨てられてしまうこともあること、また、獣医師がブースで来場者を待つスタイルの「ペット無料相談会」には、一定のニーズはあるものの参加者数が伸び悩み、啓発活動にはなかなかつながりづらい状況で

あったことが課題だった。

そこで今回、私たちは「犬の体脂肪測定」を実施した。この測定の厳密な信頼性はさておいたとして、多くの飼い主さんの興味を引くことができた。測定結果と共に、イベントの開催主旨もしっかりと啓発できた。

また、開催日が本年1月1日に発生した能登半島地震の直後の1月27日であったことから、多くの飼い主さんからペットの防災に関する質問が多く寄せられた。

今回の参加型の企画の実施は、子どもたちや飼い主さんをはじめとした市民に対し、有効な普及啓発の機会であったと感じた。

4 考 察

今回、諸事情により、昨年10月から企画・準備を開始、準備期間が3カ月間と短く、単年度予算であり実施期間も短く大変な面もあったが1回きりのイベントとしては十分な成果があったと考えている。

子どもたちや市民を対象とした教育や普及啓発活動には、日頃からの継続的な取組が必要である。北九州市が作成した本事業の報告書においても、「ペットをテーマにしたイベントの併催については、ペットと子どもの公園での共存という面で一定の成果があるものの、子どもの理解という観点では、学校で動物と触れる機会を得られるような学校飼育などの必要性が見られました」と述べられており、今後の学校動物飼育の取組など、子どもたちと動物をつなぐ活動の必要性が指摘されている。

今回の事業を通じて、自治体 (北九州市子ども家庭局) としても学校での動物飼育が重要であることを実感するとともに、教育委員会との連携・協力体制の必要性が認識された。「こども家庭庁」には、この結果を踏まえ、単年度事業の実施にとどまらず、より継続的な施策につなげるよう期待している。

5 ま と め

今回、初めてこども家庭庁の補助を受けた北九州市、子ども家庭局の事業に協力した。子どもに関わる所管が複数に分かれる、「縦割り行政」と呼ばれる弊害があることは、北九州市の行政担当部局である保健福祉局や教育委員会と共に学校飼育動物支援事業を20年間行ってくる中で感じていた中、今回の事業協力は従来の活動で連携してきた部局とは異なる、子どもに関わる所管部局に対しても本活動の重要性を伝えるための重要な一歩となった。子どもたちに動物飼育の楽しさを、また大人たちには動物飼育の重要性を伝え続けるために、26年前にこの事業の礎を築いた故中川美穂子先生をはじめ、多くの先輩獣医師の皆様が活動を続けてこられたように、次世代につながる一歩となることを願っている。